

〔研究ノート〕

文化と政治の弁証法 —和解のメディアとしての安重根—

若林 一平

〔Research Note〕

Dialectic of Culture and Politics: Ahn Jung-geun as a Medium of Reconciliation

Ippei WAKABAYASHI

Abstract

On October 26, 1909 Ahn Jung-geun as an anti-imperialist Korean Justice Army general staff officer killed Hirobumi Itoh at the Russian controlled Harbin station, who was the very big name of Meiji Restoration as the leading creator of the Imperial Japan Constitution, the first Japanese prime minister and the first Japanese resident general of Korea. Ahn was executed in Japanese occupied Lushun military prison on March 26, 1910, leaving many calligraphic works for his family, friends, and even for the Japanese prison officers. He also wrote the article about the peaceful future of the Eastern world.

This article focuses on the cultural and political impact of Ahn Jung-geun's works on the Japanese military personnel, intellectuals, and Buddhist monks and discusses the possibility of Ahn Jung-geun as a medium of Japanese reconciliation with the East Asian people.

I. 非対称の現実：進む和解と進まぬ和解

和解とは敵対していた者同士の仲直りである。つまり敵対していた事実を直視できなければ和解もあり得ない。有と無の弁証法である。やはりヘーゲルは古くて新しい。

1989年11月、当時の東独政府は市民の移動制限の撤廃を発表、この時点から東西ベルリンを隔てていた壁は意味をなさなくなり、「ベルリンの壁」の撤去が始まった。

以後、ドイツ統一、ソ連の崩壊、ヨーロッパ連合（EU）の誕生、通貨統合（ユーロ）の実現へ、ヨーロッパはポスト冷戦世界へと急速に移行してゆく。

ヨーロッパにおける変化の中心にいるのはドイツである。旧交戦国との間の和解の構造の構築に対して早い時期から取りかかっている。既に西独時代に当時の西独首相の「東方外交」により、東独の承認、そして当時のソ連との間で国境を確定していた。しかも、この国境確定は将来の統一ドイツにおいても有効であるとの書簡の添付も忘れていなかったのである。一部国民の猛反対をものともせず西独首相はポーランドを訪問してホロコースト犠牲者の慰霊碑の前で跪いたのである。これらはすべ

て冷戦時代の出来事である。⁽ⁱ⁾

現在はどうか。統一ドイツの首都・ベルリンの都心の一等地、ブランデンブルグ門のすぐ近くの19,000平米の広大な公開空間に現代アートの粋を凝らした「ホロコーストメモリアル」が展開している。和解の象徴としての見事な文化装置である。⁽ⁱⁱ⁾

一方、先の戦争の当事者を取りまく東アジアの現実はどうか。隣人との良好な関係の必要性は公的にも私的にも自明のことであろう。しかしながら、この列島を取りまくアジアの隣人との関係は国レベルでも民衆レベルでも決して良好なものとは言えない。戦後60年以上も経過した現在、とりわけ旧交戦国との間の、あるいは戦争の被害にあった人びととの間の和解が進んでいるとは言いがたいのである。ヨーロッパと異なり、朝鮮半島、あるいは韓半島、における分断国家をはじめとする冷戦構造が厳然と存在する。しかしこのことは言い訳にはならない。なぜなら旧西独の東方外交はまさに冷戦構造の最中で行われたのだから。

大切なことはナチ時代のドイツと同じく、東アジアで大日本帝国が先の戦争を主導したという事実である。自分自身の自戒の意味合いも含めていうならば、自ら引き起こした主体的な事実について、60年以上にわたって「忘却」と「置き去り」の連続であったと言っても言い過ぎではない。極めて少数の例外的な人びとを除いて。

文芸評論家の川村湊は、この国では言葉を使って記憶を消し去ることにより事実そのものを消し去ってしまう、と言っている。大変基本的な指摘であるので、次に引用してみたい。

日本では言葉というものが明確な事実を表現し、事実を明らかにしてゆくということと、反対の作用をもつものとして使われることが多い。言葉によって誤魔化す、言葉さえ誤魔化してしまえば事実は何とでもなる。魔術的というべきか、言葉の魔力性を徹底的に悪い方向に使うということだ。それを私は言霊の発想というべきだと考えているが、そうした言霊論的なものがまだまだ日本には横行している。それが日本の近代史の中で、近代の文学の中で、事実を明らかにしていくのではなくて、むしろ言葉によって事実をなしくずしにし、隠蔽してゆくということが行われ続けてきた大きな原因の一つだったのではないだろうか。だから、現在、植民地というのは殆どなかったも同然ということになっているのだが、そうした言葉によって隠し続けてきた、そして隠しおおせてきたということが、今後の日本のまた新たな問題となると思われるのである。昨今の従軍慰安婦の問題などがそうしたものの一つなのだが、そうした問題は日本が植民地責任や戦争責任を言葉によって誤魔化してきた分だけ、これからも長く他のアジア諸国から糾弾されることになると思われる。私たちは日本の歴史の中であったことは明確にあったというべきであり、それを言葉で誤魔化してはならないのだ。言葉で誤魔化することによって、それは本当にならなくなってしまふ。いや、まさにそれらの植民地、占領地の歴史は、現在の日本人の意識の中

(i) 東方外交の立役者は西独のブランド首相である。1969年首相となり、東ドイツを承認して国交を正常化。1970年8月、ソ連邦との間に独ソ武力不行使条約を締結。当時の東独とポーランド間のオーデル・ナイセ線を国境として承認。将来のドイツ統一の可能性を留保条件とした書簡を付属。同年12月には西独・ポーランド間で国交改善条約を結んでいる。

(ii) 2003年9月、ホロコーストの犠牲者のための慰霊記念建造物が着工された。設計は現代彫刻の巨匠・米国のピーター・アイゼンマン。2700のコンクリートの石碑群がブランデンブルグ門の近くから新規に再開されたポツダム広場にかけて展開する。公開空間は19,000平米。ドイツ降伏60周年の2005年5月に完成。アイゼンマンは落書きの危険にも関わらずメモリアルを囲い込む等の嚴重警備をすべて拒否。但し飲食の売店等は施設の趣旨からすべて禁止である。筆者は2006年12月現地を訪問した。高さも異なる2700の石碑が波打つ敷地に展開する様はかえって独特の厳肅さを表現している。石碑の間に自由に歩く事ができる。知性と情念が、そして苦難と喜びが時空間に展開しているのである。(ニュース記事からの引用はドイツの報道サイト“<http://www.dw-world.de/>”による)

では本当でないことになってしまっているのである。そういうことに関して、いや、それは実は事実であり、あったことなのであり、いくら言葉で誤魔化そうとしても、事実としてあったのだということをずっと突き付けていかなければならない。言葉の問題は言葉で解決する、あるいは言葉で決着をつけなければならない。⁽ⁱⁱⁱ⁾

重要な点は、国レベルの無責任さと民衆レベルでの「忘却」とは互いに完璧に補完しあう構造になっているという点である。昨日までは皇民化政策と称して国民であることを強制していたのに、戦争が終わってみれば、国民としての諸権利をもの見事に剥奪されてしまうという現実。一例を挙げれば、北方や南方に「置き去り」にされた人びとの無念さ。^(iv)

また在日の人びとに対しても戦中のことよりもむしろ戦後の処遇における酷薄さの方が大きな問題だと三世の人が言っている。^(v)

本稿では東アジアにおける和解に向けての手がかりを安重根という文化装置に焦点をあてて考察してみたい。

II. 文化装置としての安重根記念館

1909年10月26日、ハルビン駅頭にて伊藤博文が射殺された。射殺の実行者は韓国義軍参謀中将を名乗る安重根（韓国語読みではアン・ジュンゲン）である。安重根の銃から発射された六発の銃弾の内三発が伊藤に命中し、三十分後には絶命していたという。伊藤は明治の元勳として、大日本帝国憲法の起草者であり初代の内閣総理大臣でもある。同時に伊藤は乙巳保護条約（韓国保護条約）による初代韓国統監として日韓併合への道筋をつけた人物である。

当時のハルビンはロシアの管理下にあったのだが、安重根の身柄は直ちに日本当局に引き渡されて、日本が統治する旅順の刑務所に収監された。

ここで特筆すべきは、安重根は日本の人びとに影響を与えた韓国人として最大級の人物だということである。安重根に死刑が言い渡されて執行されるまでの五ヶ月間、彼の人格は、弁護士はおろか、検事から看守にいたるまで、旅順の刑務所にいた日本人達に圧倒的な影響力を与え続けたことである。まずは礼節をわきまえた立ち居振る舞いが人びとの目を引いた。敬虔なキリスト教徒として朝夕かさね礼拝。そして獄中で伊藤博文と大日本帝国の韓国統治についてさらには東洋平和論まで安重根の思想が展開されるのである。処刑される最後の日まで刑務所関係者の揮毫の希望が後を絶たなかったという。当然のことだが、遺墨の多くは日本人関係者の手を経て未だに日本国内にあると推測されている。

安重根は韓国において義士と呼ばれている。安重根に関わる歴史資料は安重根義士記念館に保存されている。筆者がここを訪ねたのは2007年3月である。ソウル駅の正面にある小高い丘の上、旧朝鮮神宮の境内だったところに記念館はある。朝鮮神宮の石段だったと思われる階段を上り詰めた場所で

⁽ⁱⁱⁱ⁾ 川村湊『南洋・樺太の日本文学』（1994年、筑摩書房）、19～20頁。

^(iv) 「内鮮一体」という標語が朝鮮半島の植民地時代によく使われていた。内地と朝鮮はひとつ。要は内地の都合に朝鮮は従うべしという考えである。「国民」であることが強制されていたのである。「内鮮一体」の標語の下で、朝鮮半島の人びとは各地に動員されていった。樺太がその典型である。四万人の朝鮮の人びとが日本の敗戦により行き場を失った。日本政府が「国籍」をとりあげ通過すらも認めないという立場をとったためである。全く身勝手な「言葉」の運用。

^(v) 例えば、在日三世の辛淑玉によれば、国籍は本来自分で選ぶべきもの。戦中は「日本国民」を強制、戦後は直ちに剥奪。それはないでしょう、と言う。『言わせていただきます』（1996年、ハローケイエンターテインメント）より。

ある。延々と続く階段をかつて朝鮮の人びとが上って行って天照大神と明治天皇を参拝させられたのである。

安義士纪念馆は映像室と売店は別として、ひとつの大きな部屋に展示物が並ぶ構造になっているのだが、入ってまず目につくのは部屋の右手にならぶ遺墨の数々である。

最初に目に入った遺墨は、「黄金百萬兩不如一教子」（黄金百萬といえども子一人を教えるに如かず）とある。一度は民族の自立を勝ち取るために学校を作り、子たちの教育から出直そうと志した安重根ならではの文章である。実に力強く勢いがある端正な筆跡である。この書は安義士が第一級の文化人であることをそれを見る人に直観させるものである。刑の執行の当日まで旅順刑務所の関係者が次々と安義士に揮毫を求めたという伝説を、実物を一目見て納得したのである。

興味深いのは、「國家安危勞心焦思」（国の安全と危機に心を労じ思いを焦がす）である。これは旅順法院の検察官安岡静四郎に贈ったものである。安岡の長女が纪念馆に寄贈した。遺墨の右上には「贈安岡検察官」、左下には「大韓國人安重根謹拝」とある。ちなみに安は揮毫を求めた当人を慮って文章を選択していたという。この場合は安岡検事の立場と文章が直に繋がっていると考えるとわかりやすい。

筆者が探していたのは「為國獻身軍人本分」（国の為に献身するは軍人の本分なり）である。この遺墨は安の看守を務めた憲兵の千葉十七に贈られたものである。揮毫を所望した千葉の願いはなかなかかなえられずに、いよいよ刑が執行される当日朝になって実現したという曰く付きの書である。千葉十七は安義士の思想的な影響を最も強く受けた人物の一人である。「為國獻身軍人本分」は慚愧に堪えないおもいで安を見送る千葉を思いやる気持ちがよく表れている。

千葉は最初「尊敬してやまない元勲の射殺犯」に憤怒の情をもって接するのだが、やがて安義士の感化を受けて伊藤博文の韓国統治政策そのものに疑問を抱くにいたる。千葉は安の死後、除隊して遺墨を仏壇に供えて、生涯にわたってその供養を欠かすことはなかった。千葉が他界した後は千葉夫人が供養を続けていたのだが、その夫人も亡くなり、安の遺墨は千葉の姪の手に渡り、東京の国際韓国研究院を経由して現在はソウルの安重根纪念馆に展示されている。^(vi)

安重根纪念馆を運営しているのは「社団法人安重根義士崇慕會」である。社団法人安重根義士崇慕會が発行する纪念馆の説明資料のハングル版は本文52頁、日本語版は本文46頁、それぞれ独自に編集されている。タイトルはハングル版は「大韓國人安重根義士」、日本語版は「大韓國人安重根」である。

ハングル版と日本語版で全く異なるのは、表紙である。ハングル版は1974年に新たに除幕された安義士の銅像である。スーツ姿でコートを着用しており、右手には大きな韓国旗の棹を抱えるようにし

(vi) 斎藤泰彦『わが心の安重根—千葉十七・合掌の生涯—』（1994年、五月書房）。著者の斎藤泰彦は宮城県若柳町の大林寺の住職である。千葉十七のために安義士が揮毫した遺墨「為國獻身軍人本分」の石碑が同寺の境内にある。この書の中で韓国の前途について安重根に次のように語らせている。「日露戦争の際、日本天皇の宣戦詔勅によれば、日本は東洋平和を維持し、かつ韓国の独立を期するためにロシアと戦ったので、韓国人はみな感激して日本人と同じように出陣していったものもあります。また韓国人は日本の勝利をまるで自国が勝ったもののように喜び、これによって東洋の平和は維持され、韓国も独立できるようになったと喜んでいました。ところが、伊藤公爵が韓国にきて五ヶ条の条約を結びました。それは前の天皇の宣言に反し、韓国の不利益となるもので国民はみな不平をとなえていました。が、さらにまた七ヶ条の条約を締結しました。これは統監であった伊藤公が、兵力をもって圧迫を加え締結させるに至ったもので、国民はみな憤激し、日本と戦ってでもこのことを世界に訴えたいと思ったものです。元来わが韓国は日本のように武力によらず、文筆でもって国を建てているのです」と。韓国こそ文化国家であるという安の強烈な自負心を理解できる。文化を二の次として、「富国強兵」、すなわち軍事と経済に邁進する大日本帝国と対比されている。比重は軍事から経済へ、戦後日本の大転換、そして現在に到る。未だ「文化」は主役となり得ていない。

て持っている。日本語版は、宮城県若柳町の大林寺境内における安の遺墨「為國獻身軍人本分」の石碑前での供養風景である。韓国の社団法人安重根義士崇慕會と日本の安重根研究会、それぞれの団体の役員達がお参りしている。『わが心の安重根－千葉十七・合掌の生涯－』の著者で大林寺住職・斎藤泰彦の献花が安重根義士崇慕會黄寅性理事長の献花と共に並んでいる。

ハングル版にあって日本語版にないページは、「安重根義士崇慕會理事長の発刊の辞」、「安義士獄中漢詩のハングル訳」、「展示場紹介」、「書誌案内」、そして「安重根義士追念歌（楽譜と歌詞）」、等である。日本語版独自のページとしてはちょうどハングルの「安重根義士追念歌（楽譜と歌詞）」にあたるページに二葉の写真が掲載されている。いずれも安重根と千葉十七の供養に集まった人びとの集合写真である。

ハングル版と日本語版とに共通するのは16頁にわたる遺墨集である。遺墨の辿った運命について日本語版に次の解説がある。

死刑が確定してからも安義士は日本人に対して些かも卑屈でない態度を貫いた。死刑執行直前にも初稿を終えた「東洋平和論」の未完を慨嘆するのみ生に対する未練は豪も示さなかった。

安義士のこのような毅然とした姿に感服した為か現存の遺墨の大部分は当時安義士を見守っていたか、周囲を監視していた日本人達が保管している。

現在国内に入っている遺墨の内、かなりの点数が日本人の方達が寄贈したものである。この方達が日帝の厳しい統制と監視の中でも、安義士の遺墨を家宝として代を継いで保管しているということに対し、私たち韓国人の立派な亀鑑として学ぶべきであると感じている。^(vii)

遺墨が残されていなければ果たしてこれほどまでの日韓を越えた人びとのつながりが生まれたであろうか。千葉十七の合掌の日々も遺墨という媒体を通して営まれたのである。安重根記念館が発行する日本語版の説明資料が含意するのは、まさに遺墨を通しての高い次元における和解の構造である。

Ⅲ. 安重根というアイコン

日本における安重根研究の歴史は、安重根生誕100年の年に刊行された市川正明の『安重根と日韓関係史（1979年）』にまでさかのぼる。その後、市川の研究は中野泰雄の『安重根－日韓関係の原像（1984年）』へと継承される。ここでは中野に依拠して安重根研究を検証してみよう。

日本の近代史における日韓関係の意味について中野は次のように言っている。

日本の「昭和史」について、満州事変以後太平洋戦争の終末にいたるまでを「十五年戦争」と呼びなら（わ）すことは、日本とアメリカおよびイギリスとの戦争を主体とする太平洋戦争の原因が日本と中国との交戦関係にあることを示す点では有効であるが、同時に、満州事変にいたる日清戦争以来の日本と中国との関係を糊塗する側面があることを無視することはできない。だがこの日中関係の見落としのかけには、日韓関係を見失っているというさらに大きな盲点が隠されており、ここに今日の「南北問題」にたいする日本人の政治的経済的態度的曖昧が根ざし、あの「首相の犯罪」における関係者たちの意図的な「記憶喪失」にも似た「歴史喪失」がある。^(viii)

(vii) 社団法人安重根義士崇慕會安義士記念館編「大韓国人安重根」、32頁。

(viii) 中野泰雄「歴史と審判：安重根と伊藤博文」、亜細亜大学経済学部紀要8（1）、21-42, 1982.

安重根が日本の韓国に対する関係の本質をついていたとして、中野は安が日本人検察官による訊問に答える中で伊藤博文の罪状をまとめた「十五箇条」をあげている。記念館の説明資料によれば伊藤の罪は次の通りである。

- 一、韓国の閔妃明星皇后を殺害した罪
- 二、韓国の高宗皇帝を廃位させた罪
- 三、乙巳保護五条約と七条約を強制締結した罪
- 四、独立を要求する無辜の韓国人を虐殺した罪
- 五、政権を強制的に奪い統監政治体制に変えた罪
- 六、鉄道、鉱山産業と農地を強奪した罪
- 七、日本が第一銀行貨幣を強制的に使用して韓国の経済を攪乱した罪
- 八、韓国軍隊を強制解散した罪
- 九、民族教育を妨害した罪
- 十、韓国人の外国留学を禁止し植民地化した罪
- 十一、韓国史を抹殺して教科書を押収して焚焼した罪
- 十二、韓国人が日本の保護を望んでいると世界に嘘を広めた罪
- 十三、現在韓国と日本の間には争いが絶えないが、韓国は太平無事であるかの如く天皇を騙した罪
- 十四、大陸侵略によって東洋の平和を破壊した罪
- 十五、日本天皇の父太皇帝を殺害した罪^(ix)

日本公使三浦梧楼の陰謀による閔妃惨殺事件は1895年10月8日に起きている。このとき伊藤は内閣総理大臣。閔妃殺害に関わった実行者たちはすべて「証拠不十分」として無罪放免になっている。三次にわたる日本と韓国、当時は大韓帝国、との協約による韓国の保護国化が進んだ。1904年（明治37年）8月締結の第1次協約では日本人の財政・外交顧問の設置が決まり、1905年11月の第2次協約（韓国保護条約・乙巳保護条約ともいう）により外交権は日本のものとなり、韓国は保護国化した。同時に統監府が京城（ソウル）におかれることとなった。日韓保護条約の交渉中、伊藤は特派大使を務めている。総務、農商工、警務、外務、等の行政全般にわたり権限を掌握して日本による朝鮮の植民地化が進んだのである。初代統監が伊藤博文である。

安重根刑死後の1910年の日韓併合以降は統監府は「朝鮮総督府」となり1945年の日本敗戦まで存続する。総督は日本陸海軍の大將が歴任し、名実共に軍事支配として一貫していた。^(x)

安重根の研究はこの間、日本、中国、韓国の研究者たちの協力により進められている。安重根の研究から日本近代史の見直しへと進んでいる。自明のものであったことが自明でなくなり、大日本帝国の基盤自体が疑われているのである。伊藤博文は大日本帝国憲法が「伊藤さんの憲法」とよばれるほ

(ix) 社団法人安重根義士崇慕會安義士紀念館編「大韓国人安重根」、13頁。検察官の訊問調書によれば、「第一、今ヨリ十年バカリ、伊藤サンノ指揮ニテ韓国王妃ヲ殺害シマシタ」のように以下に続く。十五箇条の順序は調書の順序とは入れ替わりがある。また、最後の孝明天皇殺害に伊藤が直接関わっていたとするのは安の誤解に基づくものである。しかし、亜細亜大学の中野泰雄によれば、岩倉等との関係から判断してあながち検討外れというわけではないという。

(x) 韓国に対する植民地支配に関連して「日本は良いこともしていた」という言説が時として聞かれることがあるが、精神の自由を奪われることに対するこれほど無感覚なとらえ方はないであろう。

どに大日本帝国の基盤を構築（ないし私物化）した人物である。憲法起草、内閣制度創設、初代総理、組閣は計4回、枢密院議長を計3回、日清戦争を主導し日韓併合を推進した。

伊藤が生まれたのが1841年、ちょうど大陸ではアヘン戦争の真っ最中、大日本帝国が米英に向かって開戦した年（1941年）から数えて100年前である。後発の帝国主義国家として東アジアの盟主を目指す路線の基盤を作ったのが伊藤博文であった。

IV. 知的公共圏と和解のメディア

安重根は旅順の法廷での死刑判決に対して控訴せず、自ら死を選んだ。安重根の発するメッセージは内に向けた「自死の美化」ではなくて、知的公共圏において永遠に生きようとする強い意志である。そのことが彼の遺墨に如実に表れている。

安の遺墨の与える効果は知的公共圏の中に「いる」人びとへの効果である。要はあの遺墨を見ても何も感じなければ何の効果も生じない。遺墨に接してすぐさま何かを感じるということは感じた人と安義士とは同じ公共圏に「いる」ということである。

安による死の受け入れは否定ではなくて肯定である。この点が玉砕における死の受け入れとの決定的な違いである。

玉砕のメッセージはいわば知的公共圏の否定である。それも全否定、玉砕のメッセージの発信者は知的公共圏の中には「いない」のである。旧日本軍の兵士の訊問に際して通訳を務め、後に著名な日本文学研究者となったドナルド・キーンがいつも疑問に思っていたことがある。それは、日本兵が戦（いくさ）の最中にもかかわらず貴重なはずの最後の一発の手榴弾を何故に敵ではなくて敵を倒すべき主体である自分に向かって投げつけるのであろうか、という疑問である。大切な最後の瞬間に自ら戦の原理原則を否定している。

「敵対」と「仲直り」は対概念である。戦争は公共圏で行われている出来事である。敵対にせよ、仲直りにせよ互いを認め合うところで成立している。「敵対」を認めないところでは「仲直り」もあり得ない。「敵対」を直視するところに「仲直り」すなわち「和解」が成り立ちうるのである。

玉砕とは正反対に、安は最後まで戦争の原理に忠実であったと言えよう。安義士は敵が誰であるかを明確に意識していた。遺墨こそ最大級の爆弾である。核兵器とは違う意味でその破壊力には凄まじいものがある。「黄金百萬兩不如一教子」（黄金百萬といえども子一人を教えるに如かず）とはよく言ったものである。「黄金」は高性能爆弾に置き換えられてもいいかもしれない。敵対しているが故に、検察官、警視、看守、そして（官選）弁護士らに自らのメッセージを贈ったのだ。

1909年の安重根の義挙からやがて100年が経過（2009年）しようとしている。文化資本主義はますます進行して、消費対象としての文化は拡大する一方である。かつて公共空間であった場所は今や消費の空間として商品経済の巷に成り下がっている。ホルクハイマーとアドルノは「文化はパラドキシカルな商品である。それはもはや交換されないほど、完全に交換法則の下に置かれており、もはや使用に耐えないほどめっちゃめっちゃに使いつくされている。だから文化は広告と融合するのだ」^(xi) と言う。

公共空間は危機を通過して壊滅の瀬戸際にある。まさに公共圏の担い手としての公衆の危機である。

(xi) マックス・ホルクハイマー、テオドル・W・アドルノ著／徳永恂訳『啓蒙の弁証法 哲学的断想』（1990年、岩波書店）、246頁。原著は、Max Horkheimer und Theodore W. Adorno, "Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente," 1947, Querido Verlag, Amsterdam.

この国でついで文化が主題とならぬうちに、世界は既に文化資本主義の時代に入っているのである。

この危機の時代だからこそ、知的公共圏に向けて発し続けた安義士のメッセージは意味を持ち再生してゆくべきなのである。